

最終回
マイスター
を訪ねて

Christopf Endres

クリストフ・エンドレス

Meister für
Metallblasinstrumentenbau

金管楽器製造マイスター

Nürnberg

ニュールンベルク

窓から差し込む淡い光に金管楽器のパーツが黄金色に輝く工房でクリストフ・エンドレス氏がリズムカルにハンマーを打つ。すべてのパーツをハンドメイドで形作る、彼の楽器は音色に温かみがあり、広がりや表現力の豊かさで定評がある。

撮影／津田孝二



1,2 ワーグナーの「ニュールンベルクのマイスタージンガー」の舞台でもある音楽の町。店を訪れた音楽家たちに進められて「音楽の先生たちのコンサート」を訪ねた。アパートが周囲を取り囲む、公民館を中心とする小さな広場で行われていた。手作りのステージにジャズからクラシックとジャンルも広く、少年少女のリコーダーの演奏隊からエレキギターを振り動かしてのロックンローラーなどの演奏がステージに弾ける。正午から始まったコンサートは時刻8時過ぎまで続いた。

3 金管楽器奏者の専門誌にも大きく紹介される彼の作品。中心価格帯は1本2000EUR前後。

4 近隣の住人たちも出店をしたり家族連れで見物したりとイベントを楽しんでいた。

Christopf Endres
Nürnberg

関連記事は162ページ



マイスター制度/ドイツ国家の定めた職人の最高位の名前とその育成制度のこと。1953年に法制化され、職能訓練の社会制度として機能している。

クリストフ・エンドレス

Christopf Endres
金管楽器製造マイスター

Nürnberg

ふくよかな音に魅せられて

クリストフ・エンドレス氏は35歳、若手のトランペット製作マイスターである。1971年ニュールンベルクに生まれ、6歳でバイオリンを習い、11歳でギターと音楽に親しみ、14歳でトロンボーンを習って金管楽器に魅せられた。1989年、チューバ製作マイスターのもとに金管楽器製造職人を目指して弟子入り。1991年にはトランペットを製作してゲゼレの試験に合格した。弦楽器と金管楽器の製造の町として世界的に知られるマルクノイキルヒェンのヘルマン・シュミット氏の下でマイスターを取得したのはその7年後。マイスター取得作品は6kgもあるチューバの製造であった。70にも及ぶパーツをすべて手作りで仕上げた。

ニュールンベルクにある8畳ほどの作業所には機械油と金属特有のにおいがし、使い込まれた作業台にはトランペットのパーツが準備されていた。トランペットの材料は真鍮や真鍮とニッケルの合金板が使われる。全体は大きく分けると3つの部分からなっている。朝顔の花の様な形状をしたベルと呼ばれる部分は音を出し、ピストン部分とそれに付属する1~3番管は音階を決め、マウスピースは呼吸を吹き込まれる。

材料の真鍮板は型紙を写し取られて切り出され、円錐形の型に合わせて朝顔の花の形状に叩き曲げつつ仕上げられる。二種類の金槌を使い分けて伸ばし、形を整えつつ叩き鍛えてゆく。鍛えれば鍛えるほど良い音が出ると言われていた。人の手による叩きで金属の粒子をあえて不ぞろいな大きさに伸ばすことで音が美しく共鳴するようになるという。



1 ベルになる部分を2種類の金槌を使い分けて伸ばし、形を整えて叩き鍛えてゆく。



2 ベルから伸びる管体をエンドレス氏独自の角度に曲げる作業。奥に見えるのが角度を決める型紙。



3 体重を使って押し、金槌で叩き、手作業で曲げてゆく。



4 迂回管部分のパーツ。



5 管体どうしを固定する小さな支柱を削り出す。



6 中に入れた金属ビスを叩きつぶし、支柱と管体との接続部品をつなぐ。

う。管体は少しずつ丁寧に根気よく曲げられる。急ぎすぎると曲げた部分が波だったり、亀裂が入る。迂回管とピストン部分を共鳴しないように固定するために、ごく小さな支柱を1000度以上に溶かした銀で溶接する。根気の要る作業が続く。好きでないと続けられないねとエンドレス氏は笑う。

彼の作る楽器は音色に温かみがあり、広がりや表現力の豊かさに定評がある。店にはジャンルを超えた演奏家が集い、取材時にはグレン・ミラー楽団のトロンボーン奏者が訪れていた。基本的にすべての作品がオーダーメイド。使い手のリクエストを盛り込みつつ全工程を一人で作る。完成したときの試し吹きは最高に心がときめき、嬉しい時だとほほえんだ。

(取材・文/津田孝二 コーディネート/小野フェラー雅美)

出来たトランペットを磨き上げるエンドレス氏。



マイスターを取得した思い出のチューバ。



作りかけのパーツ。